

ギリシヤ神話とギリシヤ人の特質

江口裕子

——英文學研究の一道程として——

はしがき

一、ギリシヤの自然と國家

二、神話の起源

三、ギリシヤの神々とギリシヤ人の特質

今から約三千年の昔、地中海東部に發祥したギリシヤ文明は、所謂先史時代を形造るオリエント文明の影響のもとに育ち、世界史上にならびなき文明となつた。ギリシヤの精神は實にヨーロッパ文明の源泉であり、榮枯盛衰の歴史はあれ不滅の生命を保つて地下水のごとくヨーロッパ文明の底を流れてきた。これに對立してヨーロッパを培つた今一つの流れは、ヨルダン河畔パレスティナの地に住んだ一ブラク民族の生んだ文化であり、それは唯一絶對なる人格神エホヴァを崇拜する熱烈な求道心から發したものである。これは通例、ギリシヤ思潮に對するキリスト教思潮、又はヘレニズムに對するヘブライズムと呼ばれ、互ひに相反する傾向を有してある時は榮え、ある時は衰へ、今日に至る對立の歴史をくりかへして來たことは周知の事實である。

ギリシヤの精神はキリスト教に支配された中世紀に入つてからは暫く歴史の表面にあらはれなかつたが、ルネサンスに至つて再び新しい光を浴びることとなり、更に二世紀の後ドイツのヴィンケルマンがギリシヤの美術に傾倒したのに始まつて、ゲーテを経てニーチエに受け繼がれ、近代に人間主義、合理主義、現實主義等の精神をその顯著な遺産としてゆづり渡した。ギリシヤの精神がヨーロッパ文化のあらゆる分野に滲透してゐる事實は、今日思想

や學問藝術に關する用語がギリシヤ語に起原をもつものが極めて多いことをみても明らかであつて drama, comedy, philosophy, history, psychology, geography, academy, politics, demo cracy 等々枚舉にいとまない。蓋しギリシヤの精神は、人間性の肯定と、合理精神に立脚した「人間」の自由な發展を特色とするものであり、たとへギリシヤの政治的生命は失はれても人類の歴史の存続し來つた今日まで、常に精神と文化の世界に於いて一の支配者たる地位を失はなかつた。且つ又人類が、人間自身とは何であるか、人間は如何に生くべきかといふ設問を解かうとつとめる限り、私共はギリシヤの精神の中にこの永遠の課題に對する一つの見事な基準を見出すことが可能である。そのやうな態度でギリシヤの文化財に接するとき、それは不死鳥的な生命をもつて迫り、私共が探り求めずに居れぬ精神の一故郷を顯示してくれるであらう。

ギリシヤ民族がのこした數多の價ひ高い文化的遺産のなかに、ギリシヤ神話といふ光彩陸離たる藝術的分野があり、その物語は他の民族の神話の及びもつかぬ程、後世のヨーロッパの美術や文學に深い影響をあたへ、豊富な素材と、思索の上に貴重な示唆を残してゐる。ギリシヤ精神は何故私共に不斷に新鮮な魅力をもたらずのが、又精神が民族の精神をうつす鏡といはれる以上、ギリシヤの神話の中に滲透した彼ら民族の精神は如何なるものであつたか、神話の魅力を探ることはギリシヤ人の特性とその魅力を見出さうとすることに外ならない。そこに私の興味もあり、英文學を學ぶ上にも是非歩いておきたい研究の一道程であると思はれる。もとより専門外の粗笨な一考察に過ぎず、獨斷淺薄の弊に陥る點も間々あると思はれるので豫め御諒承を得ておきたい。

一、ギリシヤの自然と國土

ギリシヤといふ名前をきいて私の頭に浮んでくるのは、まづ深い碧をした地中海、南歐獨特の明るい日光の漲つてゐる空、清澄な空氣、それをとほして望まれるくつきりとした紫色の丘、前面の海上には瀬戸内海にも似て數多

の鳥嶋が庭石のやうに散在してゐる。そのやうに明るく美しい自然を背景として小高い丘には森嚴な神殿がそそり立つてゐる。この神殿こそはある意味で古代ギリシヤの象徴であり、これを中心としてギリシヤの政治、宗教、社會生活、學藝は生み出されたのである。それは人類の歴史の黎明期における文化の一頂點を示す輝かしい記念碑である。すべての上代民族の生活がさうであつたやうに、ギリシヤ人の生活と、その神々とは、切りはなしがたい連關をもつてゐる。神々をまぐる神殿は同時に彼らの政治を執り行ふ神聖な議事堂であり、又國家が最後に據所とする城塞であつた。建築家が技をふるひ魂を打ち込んで作りあげるのは先づこの神殿であつた。又神々を讃へる祭典は古代人の精神と生活の中心をしめるものであり、美術文藝體育等すべてここに端を發してゐるのである。

ギリシヤは地勢の關係から幾つかの小國家に分れて都市國家といふ特殊な形態をとり、政治的にも文化的にもそれぞれ特色を保ちつつ、その優劣を競つたのである。都市國家といふのは、中央に小高い丘、即ちアクロポリス acropolis (高市の意) があり、その頂きに國家の守護神をまつる神殿がある。これを中心として丘のふもとに國王の宮殿があり、その周りに町があり、更にその周邊に城壁を築いて外敵の侵入にそなへた。その内部は都市區域であり、外側には百姓や奴隸が住んで農耕に従事した。之を總稱してポリス polis 即ち都市國家といふのであるが、之の都市形態は古代ギリシヤ人が神を中心として國家生活を營んでゐたことを示すものである。各都市國家はそれぞれ異なる守護神をもつてゐるが、元來ギリシヤ人はみなヘレネス民族といふ國一の民族で、祖先を同じうすると信じてゐたので、各國家は共同して神々の祭典を盛に行つた。ゼラスやアポロは全ギリシヤ民族の崇拜の對象であつたから、デルフィにあるアポロの神殿を中心として數多の都市國家が團結して宗教同盟を結んだ。これは各國家が共通に信仰する神を中心として結ばれるものであるが、同時に政治的な意味をもつもので同盟國の間に政治的紛争の起つた場合は神前會議を行つてその解決にあたり、そこで議決された事柄は神の名に於いて忠實に守られ

ねばならなかつた。

ギリシヤ人の民族的結束を固めたものに今一つオリムピア Olympia の祭典がある。之はエリス Elis のオリムピアの野で四年目毎にとり行はれる壮大な民族の祭典である。之はゼラス神の神意を慰め、感謝を捧げる宗儀であるが、この時にはギリシヤ全土から選ばれた血統教育ともに優れ、健康と、均整のとれた美しい肉體をもつた青年たちが各種の競技に覇を争つた。又詩人歴史家畫家劇作家等はおのがじしその作品を携へて民衆の前で披露するのを常とした。その詩は大方競技の覇者となつた青年を讃美するためうたはれたものであり、繪畫や彫刻も、健康と美に恵まれた青年を理想的典型として創りあげたものであつた。かかる意味でオリムピアの祭典は一面重要な宗教的儀式であると同時に他方ギリシヤの美術文藝の搖籃となつた點に注意すべきである。

このやうにギリシヤ人の神々への歸依は彼らの國家生活社會行事の基礎となり、又學問藝術の母胎ともなつたのであるが、かかる神々の信仰の如何にして古代人の生活に深く根を下すにいたつたか、又それが文藝的なものの發生と如何に關連してきたかを一般論として考へてみよう。

二、神話の起原

人類の精神活動は先づ驚異から始まる。古代の人々にとつては自然界は理解しがたいもの、打ち克ちがたいもの、恐ろしいものに充ちてゐた。太陽と月との交替によつて、光と闇の世界が生じ、太陽が突如として暗くなることがあり、月のみちかけが常習的におこる。大雷雨と共に電光が閃いて樹木の上に落ちると物凄い紫光を發して樹幹が裂ける。嵐がおこつて森林が自然發火し、山火事がおこる。人が生れたり、死んだりする。單純な原始人の心には之ら自然界人間界に生起する複雑な事象に對して恐怖や、驚異の念を生じ、之に何らかの説明を付與する必要を生じた。彼らは又外界の事柄許りではなく、人間自身的情緒のなかにも克服しがたい力を認めずには居れなかつた。

これらの自然現象や内的情緒の發動等はいづれも人間以上に強力であつて、ある時は人類に幸福をあたへ、ある時は害をなすものである。それ故彼らはかうした現象の背後に超自然的な靈の存在をみとめて之を畏れ崇拜し、之の靈的な力に頼つて幸福な生活を計らうとするやうになつた。又原始人は夢と現實とを區別しえなかつたから、夢の中に死人が現れると、肉體を遊離した魂のみの生きつづけてゐる世界があるのだと考へるやうになり、ここに靈魂の存在及び死後の世界の觀念が形造られるにいたつた。従つて彼らの祖先や英雄を神として崇拜する思想もおこつたのである。これが宗教心の芽生えであつた。

このやうに古代人は彼らを圍繞する不可解な森羅萬象の背後に神靈を想像したのであり、彼ら自身の語つたり歌つたりする言葉自體さへある神祕な力をもつものと信じてゐた。日本では言靈ことだまの信仰がこれである。即ち神が人間にかりに宿つて、その口を通して神意を告げ知らせることがある。これを神言かみごといつて、その際語られた靈妙な言葉は古代人にとつて絶大な權威と尊嚴をそなへたものであつたことは言ふまでもない。そして彼らは神言をきくことによつて彼ら自身の運命や、民族國家の將來を占ひ、その行動を決定したものであつた。之は日本に限らず、ひろく上代民族間に共通してみられる信仰であるが、ギリシヤに於てはデルフィにおけるアポロの神話や、ドドナにおけるゼラスの神話は特に民族全體に最も重んじられてゐた。たとへばデルフィでは神殿の傍に深い岩の割目があり、そこから一條の蒸氣が立ち上つてゐる。これは神の息吹と信じられてゐた。その上に三脚臺をおいて巫が坐り片手に鉢、片手に月桂樹をもつてこの煙を吸ひながら祈念をこらすことに、一種の狂亂、即ち神がかりの状態に陥つて、神話を口走る。今一人の神官が之を書きとめて事の吉凶を判斷したものであり、ギリシヤの國家的大事はおほむねこの神記によつて決定されたのである。

かかる宗教的祭儀における神話が更に敷衍され、潤色を加へられて、日本でいふ語部かたまりのごとき職業家によつて語

り傳へられて行くうちに、次第に祭儀から遊離して物語化する傾向を生ずる。ここに後世の文藝の母胎ともいふべき神話の發生系路が見出されるのである。あるひは又神の意志をきく許りでなく、人間も又神靈に物を問ひかけた、意中を訴へたり、又神靈を慰撫し讚美するための歌唱を行ふ場合もある。これらは人間の宗教的感情の端的表現とし自ら抒情的性質を帯び、従つて歌唱の形式をとるのであるが、その祈願の内容が一個人でなく、國家や民族の運命に關係するやうな重大事である場合には、その内容は勢ひ複雑となり、長大となつて、次第に敘事的な傾向を帯びてくる。かくて時代を経るに従つて神人の直接なる交通は次第に疎遠となつて、神へのものから人間へのものとなり、宗教的要素は稀薄となつて、一個の物語としてより文藝的な領域に發展して行く。我國の祝詞のごときは、宗教と文藝の未分な、最も原始的な形態をそなへたものと見做されるであらう。

更に神話の發生について今一つの系路も考へられる。古代人にとつて絶えず驚異と關心を呼びさます自然界の現象、即ち四季の移り變り、日月星辰等の天體現象、嵐や雷、地震、洪水、等の天災地變、あるひは人間の生誕、結婚、死、他民族との戦争、武勳等の人事現象に關して彼らは何らかの知的説明をあたへ、又事件によつて引き起される感動を何らかの形で表現せずには居れなかつた。これは本來人間に具はつて自己表現衝動にもとづくものであり、之が言葉をとほして語られ、未だ記載すべき術をもたぬ中は人の口から口へ、子から孫へと語り繼がれて行く中に、想像力によつて次第に潤色されたり、修正をうけたりして、最初のこのとまりのない物語の集積が次第に統一化されて民族神話や傳説の形をとるに至り、彼らの祖先の多くは神的英雄として民族の記憶の中に住みとどまるやうになる。神話傳説は最も原始的な文藝の形態であり、上代民族はそれぞれ彼らに特有な思考や情感に裏付けられた固有の神話を有してゐるのである。

以上の解釋を要約すれば、神話は民族の宗教的產物であると同時に、人間本來の表現衝動（藝術的衝動）の所産

でもあり、その中には各民族の思想、世界觀、信仰、社會生活等を必ず反映して居り、従つて私共は神話の中にもつとも純粹な民族の姿をとらへることが出来るのである。

三、ギリシヤの神々とギリシヤ人の特質

ギリシヤの宗教は多神教で、諸々の神は空にも海にも森にも泉にもゐて、それぞれの職能に應じて自然界人界を支配するものと考へられた。エジプトやバビロニア等の東方諸國でも多神教であつたが、之らの國々は熱帶、又は亞熱帶に屬して炎暑の地であり、雨も降らず、氣候は酷烈で變化に乏しい地方である。従つて人々の生活に直接影響を及ぼすものは日月星辰であり、彼らの崇拜の對象となるものは天體であつた。これに反してギリシヤは溫帯に屬し、バルカン半島の南端に位してゐるため、地中海の影響をうけて氣候はおほむね溫暖であり、しかも雨量が少ないので空氣は乾燥度が高く、清澄である。又海岸線は極めて屈曲多く、エーゲ海には無數の島嶼が散在して居る。國土には數條の丘陵性山脈が縱横に通つてゐて、大きな平原はない代りに山腹には牧畜に適した美しい草原地帯があり、平地は排水の便よく空氣が乾燥してゐるから果樹栽培に適し、橄欖、無花果、葡萄等がゆたかに實つた。このやうに地勢と氣候の變化に富み、四季折々の風光に恵まれたギリシヤでは日月星辰のみならず、山岳、河川、森林等の自然や、風、波浪、雷電等の自然現象が人間に及ぼす影響は一入であり、ギリシヤ人は之らの多種多様な現象の一つ一つに神を暗示され、これに神性を賦與したのである。しかも彼らは之に極めて個性的な彫刻的な人間の形態をあててゐる。今日残つてゐるギリシヤ彫刻の多くは神々を最も美しい人間の姿に象つたものである。そしてギリシヤ人は元來他民族の及びもつかぬ程詩的な想像力に富んだ民族であつたから、これらの神々をめぐる藝術味ゆたかな浪漫的な神話傳説を量的にも最も豊富に生み出したのであつた。

神々が美しい具象的な人間の形態をそなへてゐたことは何としてもギリシヤの宗教の顯著な特色であるが、これ

は何故であつたか、蓋し南歐獨特の戶外生活の風習を身につけたギリシヤ人たちは、四時明るい日光と澄明な空氣の中に、くつきりした物の輪廓や、端正な形態を見ることに馴れてゐた。その空氣の清澄なことは數リーグも離れた所から遙か遠方のアテネ女神の像の頸部に附した兜の飾を望見しえたと傳へられる程であり、霧や雨の多い北歐のやうに渾沌とした視界や、臃ろげな物影などはおおよそ縁遠いものであつた。かかる自然的環境がギリシヤ人の明確端正な形象美に對する鋭敏な知覺を養つたことは想像に難くない。更に又かかる地勢や氣候の影響のみならず、ヘレネス民族自體が性來極めて鋭い知力と聰明な資質をそなへた民族であつたといはれ、従つて彼らは未知なものに對しては飽くことを知らぬ探求心と、物事を曖昧にしておくことを許さず、その眞實の姿を明確な心象として把へずには居れぬ知的端嚴さをもつてのぞんだ。かかる性情をそなへたギリシヤ人が、如何なる他民族の神々にも見出しがたい程、明朗典雅な塑像として神々を象どつたことは當然といはねばならない。國民宗教の對象として宣傳されたギリシヤの神々はヘブライ民族の神のやうに神祕のヴェールに包まれて高き所に超越する見えざる神でもなく、又エチプト・アッシリヤの神々の如く牛、熊、蛇、鳥、あるひは人面獸身の奇怪な風貌をもつた神々でもなかつた。印度における三目四手の濕婆神、あるひは北歐神話における隻眼のオーディン神、隻手のティル神のごとく人間の正常な形態以上又はそれ以下の部分をそなへた畸形的な神々でもなかつた。一般に宗教の原始段階に於いては、その靈格は自然物や動物の形を取るのが普通だが、人智がひらけて觀念化の度が進歩するにつれて次第に人間の形態に昇華する。ギリシヤの神々も原初の形態はさうであつた。ゼラスの妃ヘラ女神はかつては牡牛であり、アテネ女神は梟、アルテネス女神は熊であつた。が人間に昇格した後は牡牛の黒き眼をもつヘウ、あるひは梟の鋭き眼をもつアテネとなり、單に神々の一屬性乃至は彼らに隨伴する聖獸聖物として原初の名残をとどめるに過ぎなくなる。しかるにギリシヤ人ほど速かに原始形態をすてて、神々をかくも自由に人間化し、しかも高度に藝術的な形

態にまで洗練化した民族はなかつたのであり、この事からしても彼らがいかに優秀知性と美的感覺をそなへた民族であつたかを察知するに難くないのである。

神々の人間性に關してギリシヤ人の中に認められる今一つの特質は、彼らの關心の中心となるものは常に「人間」自體であり、人間の活動する現實界であつたといふことである。彼らはあるかなしの世界を直視することを喜び、一般に見えざるものや、感知し得ざる世界への關心や考察は極めて莫然たるものであつた。パスカルのいふ「無限の空間の永遠の沈黙」といふやうな、宇宙に關する神秘的な畏敬や、深刻な内省の對象となる領域は彼らの世界の背後にはまだ開けてゐなかつたのである。累に彼らは人類史上の黎明期に生きた未だ若々しい民族であつて、生と現實界とを子供のごとき求知心をもつて直視し、これを熱愛した民族であつたらう。同じ古代民族であり乍ら、死後の生活に強い關心を抱き、その藝術をさへ墳墓化したエジプト人や、人間を煩惱の奴とし現世を業苦の世と觀するあの内觀的厭世的な佛教を産んだ印度人と比較すれば、この現實愛好と人間肯定は正しくギリシヤ人固有の性情であつたことは否めない。彼らにとつて「人間こそ萬物の尺度」であり、「五體が健全で、病氣も不幸もなく、子供にも恵まれ、自らも美貌であり、その上人生を美しく終る」ならば、それが人間として最上の幸福であつた。彼らは現實生活によく根を下し、人間のもてる天然の能力を最高度に働かせて、この地上的生活から出来るだけの愉悅と幸福とをひき出すことを理想とした。従つて神祕の中に暗示される超地上的な境界に不死の生を期待したり、現實界をかりそめの空なる世界と觀じて、來世の幸福を追求することは未だ彼らの關心の對象とはなりえなかつたのである。

たとへ彼らの世界の視野は狭く有限なものであつたにせよ、彼らは生活の周邊にある極く些細な自然の風物からも心おどらせる如き生命を見通すことなく、愛をもつて之と交歡し、その啓示する所を素朴に信じてゐた。ギリシ

ヤ人は屢々現代人よりも自然の風景美に對する感覺が鈍かつたと考へられてゐる。事實ホメルスなどにおいても自然の細微な美しい描寫はあるが、それは神々の活動する舞臺の背景に押しやられてゐる。しかしこのことが彼らの自然美に感應する能力を缺いてゐたことの證左とはならない。否彼らほど周圍の世界の美しさに鋭くふかく感動した民族はなかつたのである。彼らは現代人より遙かに自然そのものに近かつた。そして彼らは野の獸と同じやうな文明に蝕なまれぬ生命力と、分裂することなき素朴な自我とをもつて、外なる大自然の生命と呼應し、調和しつつ生きてゐたのである。彼らは河のせせらぎ、風の音、一莖の草の葉のそよぎ、山のこだまにさへも自分らと相通する生命の類似をみとめずには居れなかつた。彼らはゼラス神の聖樹であると信じた櫟の樹の葉すれに耳をすませ、その音色から神の聲をきき取つたのであり、又樹木の中にはその精が住む故に、これを伐ればその精は傷付き、枯れるときは生命を失ふものと考へてゐる。又神話の中にはそれが神々の行ふ刑罰や復讐であるにせよ、又は恩恵であるにせよ、人間が動物、植物、岩石、河川、星、泉などあらゆる自然物に轉生し、化身せしめられる物語が何と多いことであらうか、アポロに言ひ寄られたダフネは、これを拒んで危く掴まりかけた時に、一本の誇りたかい月桂樹と化し、水にうつる己が美貌に戀した青年ナルキソスは燦粹の果てに水邊にうなだれる水仙の花と化し、野猪に殺されたアドニスの血の染んだ大地からは眞紅のアネモネが咲き出てゐる。彼らは又木魂については、一人の森のニムフが叶はぬ戀に悩む中に身は消え失せて、空ろな聲の響きのみが残つたものと思ふ。そのやうに彼らは一木一草に至るまで自然の姿態のなかに溺らぬ眼をもつて觀察し、そこからとりどりの個性を限りなく繊細に感じ分けることが出来た。しかし彼らはゆたかな情感と想像力をはたらかせてその各々にふさはしい物語を結びつけたのである。ただ彼らはシルレルのいふやうに、「近代人のやうにあの心の底からの感動や、過敏な感受性や、あまい憂鬱などをもつて自然に愛着しはしない。」即ち近代人の場合に彼らのうちに失はれた「自然」への郷愁で

あるのに反して、ギリシヤ人は彼ら自身が自然であつて、自然への關心を特に自然への愛や憧憬として表現する必要はなかつたのである。

彼らがこのやうに自分たちの神々や先祖が、外界のいたる所、山蔭に、叢に、岩石や樹木や草花の中にも住んでゐるのだといふ神話的世界の考へは、彼らの神に對する親和感を増しこそすれ、恐怖を増大させ、人の心を畏縮せしめるものではなかつた。事實、彼らほど神々との親近な交りを持つた民族はなかつたのである。之は彼らが神々を人格として感得し、奇怪な原始的外敷をいち早くとりのぞき、之に高貴な美しい人間の姿態を装はせたからである。民衆を超自然的なものへの恐怖から解放したのは、實にこの民族特有の詩的想像力に外ならなかつたのである。神々への讃歌はギリシヤ民族に於いても當然、神殿の中に發生したであらうが、歌はまもなく聖域から民衆のなかに落ちた。彼らの中特に高い詩的天稟に恵まれた人々は、神々の系譜や生活、又彼らの祖先の偉業等を、彼ら自身や民衆の想像と憧れとを織り込みつつうたひつづけた。民族の志向はそこに映り出て、神々はいよいよ人間に近きものとなり、若々しい彼ら人類と一如に喜戯し、交渉する美しい象徴の世界、神話傳説が作りあげられたのである。

このやうに彼らは神々をいはば「おのが姿に似せて」象どつたのであるから、當然のこととして神々の容貌は人間のやうに美醜の差別をもち、アポロやアフロディテのやうな美しい男神や女神がある半面、ヘファイトスのやうな跛で醜男の神も存在する。彼らは喜怒哀樂の情をもち、戀愛、結婚、愛憎、嫉妬、争鬭をも事とする神々である。彼らは自然現象や、動植物を人間化したのみか、さらに抽象的な性質や力、又日常生活に關するすべての物に神を想定した。知慧、愛、勝利、食欲、睡眠、復讐、泥酔、又は農耕、婚姻、商業、牧畜、狩獵、饗宴、旅行の神等々。これらの神々のうちゼウスを最高神とするオリムポスの神々は、最も人間らしく理想的な形態を具へ、又ギ

リシヤ人が徳とした教智、美、勇武、正義、純潔、雄辨等のすぐれた素質をそなへてゐるが、劣位にある靈格はまだ完全に人間性を切らず、パンや、サチュロイの如き半人半獸、あるひはトリトーンの如き半人半魚の形を保つてゐるものも少くない。ただこれらの神々が人間とちがふ點は何故かといふに、神々は「永生不死」なものであるのに人間は「死すべき」運命をもつたものであり、又神々は超人的な權能を有し、その意志によつて人間の運命を左右することも出来、その行動は並外れて自由であるか、人間の生活には一定の限度があつて、之を越えることは許されないと考へられた。永去の觀念をもたぬ彼らにとつて死は完全な絶滅であるか、又は極めて莫とした冥界の觀念があるのみであり、死や運命に彼らは不可能の力を見たが故に之を超人的なものとして神の權能に献じたのである。彼らはここに神と人間とのこえ難い境界線をも認めてゐたのである。

さて神々はギリシヤの北方オリムポスの山の頂きに住んで全ギリシヤ民族を支配するものと考へられたが、人界はなれた聖域にのみすむわけではなく、堂々と往還にも市場にも現はれ、人間の戦闘競技にも参加し、婚禮その他の宴席にも坐り、同じ馬車にも乗る、神々の生活も極めて簡素であり、徒衆も伴はず、馭者もなしで自ら馬車を御する。ゼウスが外出する時は侍女のヘーベが車をひき出し、妃のヘラが車に馬をつなぐ。ヘラが馬車を驅つて歸ると、ホーライ町の女神が馬を解放つて馬槽の前につなぎ、馬車を壁に倚せかける條などホメロスが描いてゐる。又ギリシヤの神々ほど社交好きな神は何處の國にも見出されない。彼らは毎夕ゼウスの宮殿に集つて饗宴を開き、青春の女神ヘーベを侍らせて、不死の食物アムプロシアと不死の靈酒ネクタルの味はひ、喜戲談笑し、アポロを始めとし九人の藝術の女神ムウサイシの詩歌管絃に打ち興じ、夜更けて館に歸るのを常とした。これギリシヤの生活風習の反映そのものであつて、ギリシヤ人は社交を人生を享樂する重要な條件として居り、その社交の基盤として饗宴が盛大に行はれ、公私を問はず又特に集る目的もなく人々は宴席に會して、機智縱横、談論風發に時を費すこと

を世上の娯しみとした。ヘシオドスは「食事に満腹した後で、酒宴と見事な饗應にあづかりながら談話に興ずるのは最上の楽しみである」と述べてゐるが、饗宴における人生、政治社會に關する活潑な論議はギリシヤ人のごとき社交的には聰明な民族のみあづかり得る知的享樂であつたことを忘れるべきではないであらう。

神々は數々の人間的素質を強大に備へてゐる反面、憤り、怨恨、嫉妬、復讐心、殘忍性等といふ人間的弱點からも免かれる事は出来ない。従つて時として仲間や人間の感動や幸福を嫉妬したり、不敬虔と越權行爲に對して恐ろしい憤りと復讐をもつてのぞむ神々もある。かかる神々の住む世界は人間生活の投影さながらである。神々の性情が余りにも人間的であつて、道德的に理想的にパーソナリティではないため神話の中には尊嚴性を缺くやうなエピソードを見出すことは容易である。ゼウスは醜福家で女性を誘惑すること數知れず、ヘラは之を嫉妬して夫婦喧嘩は絶えない。「イーリアス」に於いてヘラはギリシヤ軍の利を計つて、ゼウスを色仕掛で誘惑して之を眠らせる。

ヘラはこの種の計略を一度ならず用ひてゼウスの怒をかひ、天空から鐵砧を兩足に引掛けたまま吊されたことが仄めかされてゐる。又戰罰の神アレスはその野蠻性好戰性の故にギリシヤ人に恐怖輕侮をもつて取扱はれてゐるが、戰場でアテネ女神にこらしめの一撃を蒙り、大音聲をあげて泣き叫んだり、氣絶したりしてゐる。負傷した彼がゼウスに訴へて不法をならすと却つてゼウスに叱られてゐる。このやうな點を指摘すると、ギリシヤの神々はいかに不道德であり他愛もなく、あるまじき神であるやうに思ひ、又かかる神々を創造したギリシヤ人自身も、そこに道德意識の低さを反映してゐるかに思はれがちである。ソクラテース、プラトーン、アレストテレス等の説く嚴肅な道德哲學や、ストア派の倫理的理想が、後世の倫理思想に裨益すること多大であつたことを思ひ合せればギリシヤに道德なしと速斷することは誤りである。しかし一般にギリシヤの代表的人物の中に道德的優性をみとめることは困難であり、ホメロス然りヘシオドス然り、アリストファネス、ヘロドトス、サッフオーヌ然りである。ギ

リシヤ人の熱情の對象となるものは道德よりはむしろ知識であり、藝術であり、政治であつた。彼らの多方面にわたる旺盛な知識欲は靈性の追求のみに止まることに得堪へなかつたのである。

第一、彼らにはヘブライ民族の道德意識の根幹をなす原罪の觀念といふものがなかつた。これは彼らが人間性を肯定し、人間を「本質に於ても行爲に於ても光輝ある統一體」と見做したからである。故に彼らには人間性惡を認めて罪の意識におののく如き深刻な内省は現はれず、又パウロの「われ内なる人には神の律法を悦べども、わが肢體のうちに他の法ありて我が心の法とたたかひ、我を肢體の中にある罪の法の下に虜とするを見る。噫われ悩める人なるかな、この死の體より我を救はんものは誰ぞ」といふ如き靈と肉との相剋に悩むことなく、神の恩寵にのみこの解法を委ねるといふ必要も感じなかつた。彼らは罪のことを原義で見當ちがひと呼んで極めて軽い過失の如く考へてゐる。又罪ふかい行爲に對して神の懲罰が下るといふ因果應報をみとめて行過ぎを戒めたが、之は合理的見解であつて、パウロの如く罪を責める火の如き道義の熱情は認められない。

又ギリシヤ人がヘブライ民族の聖帝に相當する宗教的倫理的に強制力ある經典を持たなかつたことも、彼らが宗教道德政治すべての方面で、法則の奴隸となることなく殆ど無制限に行動と思考の自由を得てゐた理由となる。聖帝にはエホヴァの下した律法が神聖犯すべからざるものとして語られて居り、善と惡、すべきこととすべからざることはじめは嚴然と規定され、人々は言動の一切をこの至上命令によつて律してゆけば、義人となり得たのである。即ち彼らは外からの權威に依頼して自己を靈的倫理的に純化することを第一義の道と心得たのであつた。ギリシヤにも神々の意志は神話前兆の形で傳へられ、個人又は國家生活を推進させる重要な準則となつたことは事實である。しかし之とてもユダヤの律法のやうに恒久的な拘束力を生かすものではなかつた。彼らは一般に法律や宗教道德に關する教理を文書の形に移して固定化することを嫌つた。ギリシヤの各國家では文字が普及する様になつ

てからも長く法律は成文化されず、宗教的法典を持たなかつたことがそれを物語つてゐる。彼らにはかかる一定不變の枠を作ることが、生々流動してやまぬ人間の精神の自由を拘束し、思想と行爲を硬化させ、自律性と強力性とを失はしめることを欲しなかつたのである。ギリシヤ人が頼るべき權威は「萬物の尺度」たる人間自身であり、人間の理性であり、道理の感覺であつた。彼らの合理的精神は神々から神祕のヴェルをはぎとつて之を客觀的な明確な心像としてとらへずに居れなかつたやうに、實踐道德の問題に對しても、熱情よりは理智をもつてのぞみ、しかも融通性なき既定の教義に頼ることなく絶えず變化する環境に適應しつつ、自己の理性の光にてらして行爲の善惡、事の是非を判斷したのである。しかも更に注意すべきことは何が正しく何が善であるかといふ價值判斷には彼らの美的感覺が參與してゐることであり、之が他民族には見出し得ないあの「善美」の概念を生んだのである。善なるものは美しく、惡しきもの不合理なるものは醜く彼らには映じた。従つて節制、忍耐、明智、雄辯、その他の徳は善きものであるのみならず、これを美しきものとして賞讃しえたのである。眞なるものも又同様であつた。

以上のやうにギリシヤ人にとつて、少くともホメロスの時代(B・C九一八)には神々の道德的優性は第一義として要求されなかつたものと考へられるが、これは時代からいつてもヘブライズムの如き宗教が個人の靈の救済の問題にまで深化されるべき時期が到達してゐなかつたからでもある。前六、七世紀になると彼らの間にも個人的自覺が愈々高まり、批判意識が活潑となつてそれが個人の内面に向ふ時は自ら靈性の要求となつて現はれるに至つた。従つて傳統的な神々の不道德性は一部の哲學者や劇詩人らによつて批判を受けるやうになる。例へばプラトンは青年の德育にあつてオリムポスの神々の惡徳の及ばず毒害を説き、アISKYUROSも例へばプロメシラスをゼウスに對抗させて神の専制と不合理を指摘し、エウリピデースは神々の恣意的な行爲が、道德的責任なき人間にまで及ばず災禍を描いて(イオン、ヒッポリュトス、狂氣せるヘラクレス参照)より合理的な正義を求め、因習的

なオリムポス神を糾弾することを辭さなかつた。もつとも温厚にして敬神の念厚いソフォクレスでさへ、潔白にして善良な人さへ免れ得ぬ運命(エディプス王)を見て、神の審判に懷疑の眼を向け、「神よ、げにも我らに生得の、神のあたふる禍から我らをまもる何物もなし」と嘆息をもらしてゐる。

かくてオリムポスの神々は次第に嚴肅な神らしい神へと變貌して行かざる得ず、それと同時に最初の發瀾とした人間性を喪失する。神々のなかに「人間」を見出すことによつて神と人との親密な交通がありえたのが、人間性を失つた後の神々は次第にギリシヤ人からはなれて行かざるを得なくなるのである。オリムポス神話は前五世紀以降は没落の一路をたどることとなるのである。

ギリシヤ人の愛(Eros)觀

私共はギリシヤ人が「人間」をつよく自覺し、之を標準として神々を象とり、且つ又現實的生活を肯定して之をリアリスティックに神々の世界に投影したことを見た。この生と人間とを肯定する立場に立つたギリシヤ人が、人間本然の情緒である愛といふことに強い關心を抱いたであらうことは想像に難くない。このことは彼らの創成神話に於いて萬物生成の原理として愛を想定してゐることによつても明かである。ヘシオドスの「神話記」Theogoniaによると先づ太初に混沌 Khaos があり、混沌から胸ひろき大地 Gaia が生れ、次にタルタロス Tartaros が生れ、次には美しいエロス Eros が生れた。エロスが現れるとあたりに生々の氣が漲つた。混沌はエレボス Erebos と夜とを産み、エレボスと夜が相抱いて晝と大氣を生み、大地カイアが天空ウラノス Ouranos を生み、ウラノスとカイアが相抱いて天地間の神々や巨靈を生み出したといふ。即ち創成神話では天地のけじめのつかぬ混沌の中に愛 Eros が生れると性が分れて諸々の神や事物が生れる。即ち愛は萬物を生み出す原動力と觀じられてゐる。エロスは後世、弓矢又は堅琴をもつたむくむく肥つた男兒として現はされるが、之は前四世紀以降の觀想に過ぎず、前

八・九世紀にはエロスは一つの宇宙力であり、宇宙間におけるあらゆる生物の結合生成の欲求を司る一つの靈物と見做されてゐたのである。ともあれ萬物の始めにこの愛を置いたのはギリシヤ人のギリシヤ人たる所以であり、この點を原隨圓氏は次のやうに述べてゐる。

「愛が大地と深淵と同時に發生したといふことはすべてのものの發育生命の力の根據を愛といふ點においたことである。この愛とは抽象的な愛情を意味するものではあるまい。おそらく肉體に根ざしたつよい愛撫の力を示すのであつて、民族の徳性に博愛といつたやうな情緒を意味するものではないであらう。しかしこの世に生を享けた限り生を出来るだけのしきうとする現世的な感情、根づよい生命の發展を育くまうとする執着の力をみとめないであらうか。生きんとする原動力として愛を最初においたことは何としても彼らの特色であるといつてよい。」

即ちギリシヤ人の愛の觀想はヘブライ民族の考へたやうな靈的な愛ではなく、本能に根ざした生成の欲求、愛欲を意味してゐた。ギリシヤ的な生き方の根底にあつたものはこの愛欲の重要視といふことであつた。愛欲は肉に即くものであり、肉は人間の中で最も具體的且つ確實なものであるから、具體的な確實なものを愛したギリシヤ人が之を重要視したことは當然といはねばならない。

神話では愛はアフロディテとエロスによつて象徴される。太陽神アポロがギリシヤ人の光明性を象徴する點で最もギリシヤ的な男性神であると同様、アフロディテは愛と美を兼有しギリシヤ人の美と愛欲への志向を具現してゐる點でもつともギリシヤ的な女性神である。とはいへアフロディテは本來は東洋のセム族からフェニキアの商人らによつてギリシヤに輸入された外來の神であり、北方ギリシヤ宗教の神々に加へられる迄は母系制南方宗教の崇拜の對象たる一個の獨立した偉大なる「地母」Earth-motherとしての靈格であり、あらゆる野生動物の支配者でもあり、投槍や楯を手にした戦嚴の女神でさへあつた。「ホメロス讃歌」におけるアフロディテは正しくかゝる存在

であり、「野獸どもの母なるかの女は泉多きイーダの山に到りぬ。山間の徑を直ちに館に向ひて歩みたり、あとより尾をふりて灰色の狼、燃ゆる眼の獅子、熊、小鹿に餓ゆる脚早き豹など甘へ媚びつゝ従ひ行く、その姿に女神の心喜び、かれらの胸に欲情を送り入れぬ。」と詠はれてゐる。南方層宗教即ちヘレネス民族が北方から南漸してギリシャ半島を統一する以前に住んでゐた異民族の宗教においては「地母」は大地のあらゆる生物の母であり、自然の強い生成力を司る靈格であり、かゝる靈格は屢々愛欲の女神の一面をも兼有してゐた。といふことは、地上のすべての生物發生の根元には當然之を成り出でさせる愛欲を想定せねばならぬからである。そしてアフロディテも正しく本源的にはこの種の「自然の生成力」の具象化であると同時に、愛欲の女神と觀せられてゐたのである。かゝる女神としてのアフロディテがオリムポスの神々の一員となつた後は從來の野性をぬきとられて典麗優雅な女神へと變貌するのであるが、特にギリシャ人が彼らの美への強い憧憬をこの女神の性能に投入して愛欲と同時に美をも兼有する女神たらしめたこと、且つ又宇宙的な愛欲の神、或は猛々しい戰闘の女神としての風貌を次第に消失して、男女間の愛戀を司る神へと洗練されて行つたギリシャ化の過程は優美なものを愛し、盤的なものを嫌つた彼等の性情とを思ひ合せるときは極めて興味ふかいものがある。

エロスは現在私共の思ひ浮べる限りでは肩に翼を持ち、花と堅琴、又は弓箭をもつたばら色の頬をした男兒であり、アフロディテの子供として常に女神に隨伴してゐる。矢には黄金の矢と鉛の矢とがあり、前者に被られたものは烈しい戀情をおこし、後者は戀愛を嫌ふ心を起す。エロスは神々や人間の胸に矢を放ち、戀の悲喜をかもしては興がる惡戯好きな少年と考へられてゐる。且つ又エロスは永久に年をとらぬ子供の姿をとるのは愛の青春性をあらはし、弓箭は戀愛の衝動的に、氣紛れに生起する性質を現すものとも考へられる。しかしエロスは最も原初の形態に遡つて見ると、ハリソン女史の指摘してゐるやうにギリシャ人がケルポス派と呼んで信じた精靈の一つであつ

た。人が死ぬ時その靈魂、生命力が蛾様の小さな羽根の生えた物となつて口から遁れ出る、かゝるものを彼らはケルと呼び、宇宙公には人間に恩恵、災厄をもたらす様々のケルが存在すると考へてゐた。そしてエロスは生命又生成のケルに外ならなかつた。ヘシオドスの「神統記」には

エロスはおのが時節に、春の花とともに来る。

生れの里、美しき島キュプロスを後にして、

エロスは来る、人のため種子を大地に蒔き散らしつゝ。

と詠はれて居り、有翼の精靈が花の咲いた小枝をもつて飛び廻り、凡ての動植物に生命を恵むものと觀ぜられてゐる。このエロスが前述の如く宇宙創成の神話に於ても偉大なる萬物生成の原動力として現はれてゐるのである。その後は次第に自然界の生物一般から人間欲の愛戀を司る靈格に迄成長して來たが、最初は秀麗な青年型をもつて表され、男女間よりむしろ男性間の愛情を司る靈格であり、更に轉じて男女間の戀愛を司る肥つた男兒の形をとるに至つたのである。がいづれにせよその性能は本來生命の精靈であり、生物の生成發展を管掌する靈格であつたが故に愛欲の神たる一面を持つに至つた事情はフロディテの場合と同様であり、後代同じ性格をもつ女神と結び付けられ、その隨伴者と觀じられるに至つたのも當然の結果といふべきであらう。

ギリシヤ神話には神々又は神人間の愛戀を扱つた物語は他民族の神話とは並びもつかぬ程豊富であり、百花繚亂として目も彩な戀愛繪卷が展開する。アポロとダフネの悲戀、フロディテとアドニス、エロスとサイキ、セレーネとエンディミオン、アポロと少年ヒアキントスの同性愛、ナルシサスの自己の美貌への戀着等々、之らの物語はすべて浪漫的な想像力に光被されてはゐるが、その愛は本質に於いて現世的な樂欲、直截な感覺愛を意味して居り肉肉的起原を超越して靈魂の融合をあこがれるといふダンテ的な愛には些かも言及する所がない。これはいふまでも

なくギリシヤ人が人間性の根底に根ざした能動的な情念としての愛の、もつとも自然な具體的な様相に價值をみとめ、現實的肉的な面から愉悅の源を抽き出すことを求めたからに外ならない。かのサッフオの戀愛詩に、

……あなたを見ると私の聲は萎え、私の舌はもつれる。微妙な焰が私の全身を走り、私の眼は何も見ず、私の耳は鳴り、汗は流れ、四肢はふるふ。私は秋の草より青さめ殆ど死ぬ許りに見える（意譯）

とあるが、愛人を一瞥するや電撃のごとく五體を貫き、震撼させるといふこの肉體的感情は、ギリシヤ人の愛に關して極めて短刀直入な、現世的な態度を雄辯に物語るものであらう。

次にギリシヤ人の肉の肯定は、端麗な容姿と健康な肉體美人の憧憬となつて現はれる。彼らが彫塑的な美に對する鋭い感性に恵まれてゐたことは再三述べた如くであるが、彼らは自然の上にも人體の上にもこの美をあくなく玩味嘆賞すると同時に彼ら自身も美を創造し、彼らの上に實現を期せずには居れなかつた。この憧憬が神話に現はれる主要な神々や人間に殆ど例外なしに美しい容貌をあたへ、又數多の彫刻像に神々しいまでの肉體の調和と端正の美を實現せしめ、又實生活上では各種の運動競技によつて四時肉體を練磨し、オリムピアその他の祭典でその美と力とを競演する風習を生んだのである。

ギリシヤでは男女を問はず容姿の美は人間の幸福の一要件であり、市民が政治上社會上の要職につくに缺くべからざる資格の一つとさへ考へられた。ギリシヤの諺のなかには幸福の條件をあげて、「先づ健康、第二に容姿の美、次には正當にえた富、第四に友と共に若きこと」といつて居り容姿を第二位に掲げてゐる。ソクラテスでさへこの例外ではなかつた。プラトーンの對話篇「カルミデス」の傳へる所によれば、長期にわたる陣營生活から歸つたソクラテスが故郷の人々に先づ聞きたゞしたことは國內の輓近の哲學事情と、智にすぐれ容姿も端麗な青年の出現の有無であつた。やがて當の青年カルミデスが現はれるや讃嘆の餘り茫然自失のていであつたといふ。ギリシヤ人の

人體美に對する鑒賞は女性の容姿以上に、今日想像も及ばざるほど男性の凛々しい秀麗な形態に注がれてゐたのであり、ソクラテスはその一例にすぎず、オリムピアの祭典では競技の覇者となつた青年に對し、詩人畫家とぞつてその榮譽と共に肉體の美を讃へてゐるし、ギリシヤの都市では時に廣場に於いて、美しい女性のみならず、男性のためにも美の鑑賞會がひらかれ、優勝者には褒賞を授けられたといふ民間の歴史が之を物語つてゐる。この男性美への憧憬は屢々男性同志の愛欲趣味となつて現はれてゐる。神話におけるアポロとヒアキントスの物語、ゼウス神が鷲に化してイダ山に羊を飼ふ美少年ガニュメデスをさらつて神々の饗宴に侍らせた物語、數多のニムフの切なる求愛を嫌つて、水に映る己れの美貌に戀ひこがれ、遂に水仙の花と化したナルキッスの物語等は古代ギリシヤに行はれた男色的傾向を解く鍵である。ギリシヤではむしろ爲政的見地から、即ち生活の不安定と人口増加を阻止するために、指導者階級が意圖的にこの風習を採擇し、獎勵する向きがあつたと言はれる。

しかし美は限りある人間に宿つたかりそめのものであるから、肉體の老衰とともにその美も移ろひゆくべきものである。美を熱愛したギリシヤ人の願ひは、神々とひとしくいつまでも若々しく、美しくありたいといふ事であり彼らほど老醜を忌み嫌つた民族はない。ソフォクレスが「コロノスのエティプス」の合唱で「老年こそ人間の最後の運命なれ、憎惡すべく、無能力、非社交的にして友もなき老年——そこにあらゆる惡中の惡は存す。」と詠はしめて、老年を惡とさへいつて呪つてゐるやうに、老年は美しく生命から見離され、生の愉悅を味ふ力の喪失に外ならない。彼らがこの若さと美とを永遠に所有したいといふ願望は、かのキーツを魅了して「美しきものは永遠の愉悅」と詠はしめたエンディシオンの物語に凝結してゐる。カリアのラトモス山に年を追ふ牧人エンディシオンは晝間は野に羊を飼ひ、夜は山の洞窟で眠るのを常とした。たま／＼月の女神セレーネは眠る若者の美貌に心惹かれて夜毎に彼の許を訪れる。がその美を失ふ思ひに得耐へず、ゼウスに乞うて人の子エンディシオンに不滅の若さをあたへ

よと願つた。ゼウスは永遠の若さを願ふものは永遠に眠らねばならぬと宣告した。かくて若者は永遠の若さと美を保ちつゝ、洞窟に眠ることとなつた。といふ物語は死を代償としてまでも美を永遠化せずにはやまぬギリシヤ人の美への熾烈な崇拜を象徴するものではなからうか。このやうに彼らが美に感動を覚える反面、如何に醜さものを排斥したかを示す興味上から神話の一例をあげれば、アテネ女神が二重笛といふ樂器を發明して、神々の宴席で自ら吹き鳴らし披露に及んだ所が、惡戯子のエロスがその顔がおかしいとて笑ひ出した。女神はひとり泉に顔を映しながら吹くと、頬邊がふくれて成程器量を損すること甚しい。女神は恥と怒に面を染めて笛を放り出し、笛に呪ひをかけた。之を拾つたマリュシアスは呪ひによつて慢心を生じ、音樂の神アポロに挑戦するに至つたため、アポロはその傲慢を憎んで、マリュシアスの生皮を剥ぎ木の枝に吊したといふ。このアテネ女神の容色を台なしにした醜きものを再現せんとした者に對する懲罰の苛責なさを見ても、ギリシヤ人の醜惡なものへの烈しい嫌惡を十分にうかがひ知ることが出来るであらう。

ギリシヤ人の間に萬一畸形や不具の子供の生れた場合は、本人や一家の不幸はいふに及ばず、その町やひいては民族全體にとつての過失であるとさへ考へられ、彼らは神々に宥しを乞うたのであつた。アリストテレスはポリスに於ける市民の質と量とを制限するために畸形兒や不具者を槍玉にあげて、之を育てるべきではないと主張して居るし、萬一ひどく醜く生れついたものや、生れて後に不具となつたものは一生不運であつて社會の片隅でつましく暮さねば、世間から愚弄されることも覺悟しなければならなかつたらう。マブラトーンによれば病弱なものも生きるべきではなく、その子孫を残すことも許されない。ギリシヤ人は美や健康の優越を重んずる餘り健全ならざるものは生きるに値ひしないといふ今日の私共にとつては非道なまでに割切つた見解が一般の間に通用し得たのである。

以上のやうに諸種の神話をとほしてギリシヤ人が最も具體的にして確實な肉を肯定し、それに屬する美と力とを尊重したことを學び得た。しかし注意すべきことはかゝる感覺的美的なものへの熱情と並行して彼らには常に精神の優越に對する高き評價、眞理への老いることを知らぬ知的欲求があつたことである。「吾らは美を愛して過度に流れず、知慧を愛好して柔弱に墮すことなし」といふペリクレスの言葉は蓋しギリシヤ人の理想とする所でもあり、ギリシヤの精神のあけのまの姿であらう。この精神の均衡の上に築かれた彼らの文化が秩序と沈靜の美を保ちつゝ尙躍如たる生命を失はず、時の審判によく得堪へた所以である。

次章として豫定してゐて「神々の嫉妬」、「ギリシヤ人の運命觀」、「ギリシヤ精神と英文學との關係」は紙數の都合により別稿に譲ることとする。

附記 「和要」前號に掲載した「E・A・ボオの時に現れた死と愛との聯合について」は東京女子大學「論集」第三號の同題目の論文の不完全なる部分を補正加筆したものである旨前號では手違ひのため脱落しましたので右お断り申上げます。